

平成26年度 博物館実習報告

— 受講生のレポートから —

私の理想の博物館教育

文12-158 柏 裕子

博物館実習の講義を含めた、学芸員資格科目を受講する際に常々感じていたのは、私は学芸員に向いていないのではないか、学芸員という職業はそれまで私が想像してきたものとは違うのではないか、ということである。高校時代に学芸員という職に興味を持ち、一年次から関係する科目を受講したが、受ければ受けるほど面白いとは感じないし、ここで学んだことがどう実務につながるのだろうと考えていた。実のところ、今まで受講してきた学芸員資格科目の成績はあまりよくなく、自分が学芸員になりたいという興味も薄れ、資格取得のために単位をとってきたが博物館実習という科目を受講するか悩んでいた。

そのとき私の背を押してくれたのが博物館教育論の講義である。二年生の後期に受けたその講義は、博物館の成り立ちや歴史、そして教育施設として博物館は何をすべきか。という内容であった。それまでの講義で一番真面目にノートを取り、心から耳を傾けた講義であった。その当時は教育論の何が私を引き付けたかわからなかったが、学芸員に対する興味を持ち直し、実習を受講してみようと考えた。実習の課程をすべて終え、博物館教育というものの何が私を引き付けたのかだんだんと理解できてきたように思う。私が学芸員という職に興味を持ったきっかけを振り返りつつ、私の理想としている博物館教育について書いていきたい。

私が学芸員という職業を意識したのは高校一年生のときである。部活の顧問の先生のすすめで、ある博物館のバックヤードツアーとワークショップに参加した。ワークショップの内容は学芸員業務を体験してみるという内容で、いくつかある資料の中から自分が好きな物を選び、その資料を観察しながらワークシートを記入し、実際にケースの中に展示してみようというものであった。ワークシートには、資料のスケッチをしたり、何時代の物か、だれが何のために使ったのか、何でできているかなどの質問に対して、内容が正しいかどうかではなく資料から感じたことと自分の知識を自由に使って答えていく。最後に選んだ資料に資料名をつける。今考えると、発掘調査の出土品や収集した資料の資料カードの作成の疑似体験であったと感じる。学芸員という職をそのとき知った私が、このワークショップを鮮明に覚えている理由は①博物館の本物の資料にふれることができたこと。②想像を多く含むが、観察から得たものと自分の知識をからめながら資料の情報を書き出していくこと。③実際の展示ケースに資料を置き解説を行ったこと。の

三点だと考える。ただの高校生でしかない私が、博物館の「本物の資料にふれることができた」というのが学芸員という職に興味を持ったきっかけである。

この「物にふれる」ということは、以後私が物事に興味関心を持つきっかけとなった。私は高校生のとき考古学部と茶道部を兼部していたのだが、考古学部は顧問の先生がおもしろい人だからという入部理由だったが、教科書や博物館でみた瓦や甕棺が部室にあり、本物であったが自由にふれることができた。また古墳の発掘に参加させてもらったりもした。出土品を破損させて怒られることなどもあったが、資料収集の意義と物を扱う際の心構えを学んだ。茶道部は以前習っていたことがありお点前をきちんと身につけたいというのが入部動機であったが、入部後に道具のとりあわせに魅せられた。毎日活動前に倉庫の中で、今日は何の茶碗にしよう。棗はどれにしよう。そろそろ掛け軸も変えないといけないな。などととりあわせを考え、その日その日のとりあわせから何を感じたかを部員や先生に聞いてまわることが楽しかった。これはある意味、学芸員の展示解説につながる部分であると思う。

実物を扱うとその資料の魅力を伝えたい。物にふれて観察しいろんなことに気づくことがどれほど楽しいかを伝えたいと思う。「物を扱う楽しさ」が私を学芸員資格科目へと導いた。その気持ちに呼応したのが、博物館教育論だったのだと思う。

自分で調べたり講義を受けていくうちに、私が学芸員の仕事の魅力に感じていたのはエデュケーターとしての役割でないかと思いついた。インターネットでミュージアムエデュケーターと検索すると、学芸員とは別に教育担当・エデュケーターの募集がヒットする。その募集要項には、博物館と社会（来館者）を結びつけるのがエデュケーターの役割だと書かれていた。エデュケーターとして私は何がしたいのか考えていたときに思いついたのが、博物館とは少しことなるが私の理想と合致する、九州国立博物館の無料体験展示室「あじっば」である。あじっばには主にアジア地域の民具・楽器・おもちゃなどが国ごとに展示され、自由にさわって使ったり遊んだりできる。あじっばは博物館の入口から展示室までの途中にあり、博物館の入館料を払わずに利用でき滞在時間の制限もない。展示品のラインナップから対象が子どもであることが想像できるが年齢に関係なく、自分の興味が向いた物を手にして使い方を考えたり遊んだりできる。またボランティアが在中していて、質問を受け付けたり、使い方の実演や解説・投げかけを来場者に行っている。私も何度か足を運んだことがあるが、あじっばに入るためにすることといえば入口で靴を脱ぐ程度で、靴を脱いでいるので、興味を引くものがあれば好きなどすぐ座り込んで物を扱うことが可能になる。あじっばが私の理想と合致する理由は以下の三つである。

- 実際に物を扱い体験しながら学べること。
- あじっばの展示が常設展示と関係する場合もあり、常設展示を見に行くきっかけにもなる。
- 博物館の空間内であるがゆったりとしていて、展示室に入る前や後のウォームアップや休憩の場として使える。

博物館での展示は多くが、ケースの中の資料をガラス越しに見てキャプションを読み、その資料がなんであるかや特徴、展示品として選ばれている意味を把握する。そうした展示方法であっても、初めて知る情報があったり、見た目から興味を持つことは可能である。ただ、そうした展示から興味をもった物に、実際に手を触れることができれば、その人がもった関心をよりくすぐ

り、展示を見るだけの状態から一歩踏み込んだ教育を提供することができると考えている。実習の講義の中にも実習展の際だけでなく、刀剣の扱い方やお茶と文化など物を実際に扱いながら、その物の歴史や背景にある文化を学ぶものがあつた。体感して得た知識や感情は見たり聞いたりするより身にしみつく。自分が今まで体験してきたように実際に手に取ることで、より博物館資料と来館者を結びつけることができるようになりたいと思う。

博物館は教育施設であると同時に、資料を収集保存研究するための基点でもある。そのため実物を扱いながら興味関心を伸ばすという展示や教育方法は、予算や資料保存の面から考えれば相反する部分もある。また教育プログラムとしては、物を扱うこと以外にも、インタープリテーションや特別講座、ワークシートなど様々な方法がありそれぞれに長所がある。学芸員という職でなくても、私なりに物を扱うということを軸にしながらどんな教育プログラムができるか、ということは今後も考え続けていきたい。

以 上

博物館実習を終えて

文12-14 阿部 瑞季

今回のレポートは、一学生ながら現在の博物館や周囲の環境、今後の展望を予測したものである。

博物館実習を受けている間、何回も博物館がピンチであるという話を聞いた。

博物館での勤務を希望する人間や、学芸員の立場から博物館の存亡を訴えても大きな効果は期待できないのではないかと思う。博物館事業に興味のない人間に対して博物館の重要性を説いたところで、意味がない。

私はこれらの状況を悪化させないために、教育から徹底をはかるべきではないかという考えにたどり着いた。

私は幸運にも、この一年間近くで博物館がどのように社会に貢献しているかということをもっと理解してきた。裏方の話を聞く機会に恵まれ、先生方の講義によるところであり、本当にこの授業は充実したものであった。

多くの博物館は、青少年や生涯学習者の学習の現場であり、研究施設であり、また国内外の人種を問わない観光施設であるという側面も見えてきた。さらに地域住民の交流の場になることや、休日に家族で出かけるレジャー施設として利用される例もある。

私もかつては小学校の授業で博物館に行き、家族にもよく連れて行ってもらった。まだ福岡に住んでいたとある夏の日に突然、吉野ヶ里遺跡に連れて行かれ、想像もつかないような昔にこの場所に大きなひとつのムラがあったことや、甕に入った頭蓋のない人骨が並ぶ資料館で土地や食糧をめぐる戦争があったことを父から教わったものである。こういった学校行事や両親による教育は、私の歴史好きや考古好きに繋がっている。

しかし皆が皆、私のように、例えば歴史を知ることが楽しいと思える教育を受けてきたわけではない。

どんな学校にも一定数勉強の苦手な生徒がいるはずである。

普段は椅子に座って教科書を読むだけの勉強ではなく、五感を使って学習するチャンスが博物館にはあると思うし、なくてはならないと思う。

博物館のような教育現場を名乗る施設は、積極的に新しい勉強の形を提案する場でなければならない。

私が小学生のときに行っていたら人生が変わったのではないかと思う場所がある。国立科学博物館である。私はその中でも地球館三階、剥製のヨシモトコレクションである。多くの人が一生涯出会うことのない動物たちがガラス越しとはいえずぐ近くに展示されている。生物というものは図鑑で見ることはできても、大きさを想像することが難しいもののひとつだと思う。どんなに図鑑の出来が良くても、写真が鮮明でも、実際に見るということにはかなわないだろう。残念ながらヨシモトコレクションは剥製標本だが、この動物が本当に動いているところを自分の目で見て

みたいと思わせるほど壮観である。

この展示室の特徴的なところは、いつ行っても子どもがたくさんいるところである。ヨシモトコレクションにはかわいい動物ばかりがいるわけではない。ヒグマなどは立ち上がり口を開いて見学者を威嚇するような剥製である。だが子供たちは目もそらさず、懸命にガラスに張り付いて動物たちを観察しているのである。彼らは皆興味があるのだ。親に動物の名前を教えてもらって特別気に入ったのか、ぶつぶつと繰り返しながら展示室をあとにする子供もいた。私はそういった光景から、この子達は将来は動物学者や獣医になりたいと言い出したり、そこまでいなくても近所の犬猫に今までとは違った目を向けることができるのではないかと思う。

現在博物館はいらないと主張する立場に立つ人はおそらく、博物館に行ったことがないか、博物館が楽しくなかったのだと思う。双方「お金はかかるものなんだ」「これ以上出せない、経費削減したい」の一点張りでは、進歩もなく調和もない。確かに互いに譲れない主張ではあるだろうが、もっと根本的な意識の改革をし、どちらも納得しなければ話は永久にこのままか、どちらかが強硬手段をとることになってしまいかねない。

そうさせないためには違う業種の人間同士にありがちな発想をなくすための教育が必要とされる。「研究がなくなっても生活費は別の方法で稼げる」という発想をする人間を減らし、その道の研究者がなぜ一生を研究に捧げようと思ったのかを、共感はできなくとも理解できる世の中をつくるべきなのである。極端な話、サラリーマンと物理学者がお互いの仕事を尊重しあい、相手からの尊敬に恥じない成果を出さなければならないのである。

研究者側も工夫するべきだと思う。より良いものを使うことは言うまでもなく大切なことだが、同時に費用を抑えることも考えなければならない。よくこれ以上切り詰められないという声も聞く。単純に値段が高いものを使って満足するのではなく、研究に支障のでない代替案や代用品を探したり、資金の工面の煩雑さや大変さを知ろうとしなければならない。

今論争をしている人たちを止める手段を私は持たないが、今後増やさないようにする対策を考え、実践することはできる。

まず、博物館に行ったことのない人がいない世の中にしたい。義務教育期間中、必ず博物館系の施設を一年間に一回以上利用することを義務化するべきである。

義務化となると反対意見が多々出ることが予想される。「そんなに頻繁に行く必要はない」「全ての生徒の学習意欲向上に繋がるとは限らない」「教科書で十分」といった意見が聞こえてくるようである。

しかし解決策はある。博物館を、行くたびに発見があり、多くの人のためのチャンスやヒントが存在し、教科書では学べないことを教えてくれる場所にすればいいのだ。

私は小・中学生のうちに博物館を何回も訪れることは決して無駄にはならないと思う。彼らは年齢的に無条件に何にでも興味を持つことのできる年齢である。例え同じ博物館に複数回行ったとしても、成長するたび理解度や着眼点が変わってくるため、飽きることはないだろう。また、課外学習は普段とは違ったコミュニケーションの場になりうる。もし見学の日展示の内容が全く頭に入ってこなかったとしても、学友が増えるきっかけに博物館が一役かったと考えることもで

きる。

図書館に行かなくてもネットには膨大な情報があり、家から一歩も出ないで世界中の街を Google Earth が歩かせてくれる、そして小学生でもパソコンを活用して前述したことができる時代だ。そんな時代だからこそ、博物館までみんなで騒ぎながらバスで行き、自分の五感を使って体験し、いつもと少し違う思いで帰り道を歩くような、いかにもアナログな教育と、教育現場がなくてはならないと思うのだ。

あらゆることに言うことができるはずだが、「つまらない」という感想を抱かせてしまうことは、とても危険なことだと思う。「つまらない」という一言は、対象への興味の一切を奪ってしまう言葉だからである。私は博物館がこの「つまらない」という感想を生み出していないか不安だ。

私は実習を受けながら、頭から離れない言葉があった。「現状に胡座をかいている」というものだ。

私は現在、関西大学日本酒同好会の会長を務めている。私たち学生が一番ふれあい、目にする機会が多い日本酒は大手蔵元の酒だ。しかし大手の酒は悪い印象を残しがちで、日本酒から若者を敬遠させるきっかけとなってしまう。一定数需要がある今、特別なことをしてまで顧客を増やさなくてもいいという発想が、粗悪な商品売り続けることにつながっているのである。また、同業者同士の馴れ合いが商品に変化をもたらさないのではないかという意見もある。

私は博物館にもこれと全く同じことが言えるのではないかと思っている。貴重なものを収蔵しているから、展示しているからすごい博物館だということにはならない。現在入館者数が一定数いても、将来的には新たな客層が必ず必要になってくる。「良い展示品があるから」「いつも人は来てるから」という現状を変えなければならないと思う。

求められた事が何かを分析し、社会から求められる存在にしていかなければならないと思う。

たとえスタッフの入れ替えが少なく年功序列の職場であっても、新しい若い人が入ってきたらその人の意見や、その人自身が大切にされる環境にしていかなければならない。

博物館実習を終えて

文12-36 増田 桃子

はじめに

実習展が終わり、はやくも二ヶ月が経とうとしている。実習展準備の後半一ヶ月は、飛ぶように過ぎ去った。中身の詰まった濃密な時間だった。この実習展を通して、私は自信を持って言えることがある。それは、私はきっと今年度の博物館実習を履修し、実習展を作り上げた仲間たちの誰よりも、この実習展を楽しんだということだ。普通の生活をしていたら出会えないであろう人たちと出会い、刺客たちのそれぞれの素晴らしい能力に驚かされ、ともに助け合って、ゼロから展示を作り上げた、熱い時間と経験を、きっと忘れることは無いだろう。

1. 博物館実習を通して

博物館実習の授業（中でも実習）は、普通の大学生活をしていたら絶対に経験できないようなものがたくさんあった。昆虫の標本作りから始まり、資料の取り扱い方や掛け軸の扱い方、のりパネ作り、写真撮影の仕方、拓本、お茶室でのお作法など、さまざまなことを、実際に学ぶことができた。

中でも印象が強かったのは、刀剣の取り扱いの授業である。まさか本物の日本刀に触れられるとは思わなかった。あのときのワクワク感と、刀の重みは今でも覚えている。一口一口にそれぞれ工夫が凝らされていて、違った美しさがあり、職人さんの熱い想いや技術が込められているのだと思うと、日本刀にはまる人の気持ちかわかる気がした。また、この実習の先生であった、河内國平さんや、表具の実習の先生であった藤枝さんのような、プロの方から直接お話を伺うことができるのも、この実習の魅力の一つだと思う。

この授業の面白いところは、一回生、二回生のときの座学の講義では知ることは難しかった、学芸員の授業をご担当くださった先生方の専門性とすごさがよくわかることである。一回生、二回生の教室での講義のときよりも、イキイキしておられる先生も多かったようだ。どの先生も学芸員の仕事の魅力をお話くださるときはとても楽しそうで、博物館実習を受講するまでは、正直それほど学芸員という仕事に興味があるわけではなかったのだが、先生方のお話をきいていると学芸員の仕事はとてもやりがいがあって、おもしろそうだと感じるようになった。

また、熊先生がしばしば、「博物館実習の授業はお作法の授業だ」というようにおっしゃっておられたが、博物館実習に全く関係のない場面でも、当然実習展でも、実際あの言葉は本当だったと実感する場面があった。大切な資料に触れる前に装飾品を外す、手を洗う、などの実際の行為はもちろん、それを目の前で“みせる”パフォーマンス的な意味も含めて、相手様とこちらが気持ちよくやりとりする上で重要なことであると感じた。また、梱包の仕方なども、今後必ず役に立つと思う。お茶室での実習はそのお作法の最たるものである。襖の開け方や和室での身の処し方、会話の仕方、立ち居振る舞いなど、和室のお作法においては基本の“き”のようなものであろうが、この実習がなければ、私は日本人であり、日本史文化遺産学専修で学んでいるのに、和室での正しい振る舞い方を知らずに社会人になっていた。これではいずれ将来、和室に招かれる

ことがあったときにきつと恥をかくことになった。それに、日本人である以上、それらは最低限できるようになっておく必要があるだろう。そういった意味でも、この実習は非常に私にとっては役に立つものであった。

2. 博物館等施設見学、東京実習を通して

この一年間は、間違いなく今まで生きてきた中で、数多く博物館や美術館を訪れた年であった。学校にいただけでは学べないことを、自分の目で見て、実際に体験するためにも、また、どうしても観光などでは博物館よりも観光地に行ってしまうがちであるのでそういった意味でも、この施設見学は良い機会である。それぞれの館ごとに違ったおもしろさや工夫があり、実際に行ったからこそわかることもあり、勉強にもなった（見学後、友達とお茶に行くのも楽しみの一つだった）。ただ、少々家が遠いので、琵琶湖博物館まで片道三時間半ほどかけて行ったりするのは正直辛いものがあったのは事実である。だが、琵琶湖博物館は大変展示が充実しており、スペースごとに、魅せ方も工夫されていて、全く飽きなかった。自分が研究員の一員になったような気分になれる面白い展示もあり、こどもも大人も楽しめる良い博物館だった。レストランも、単においしい料理を出すのではなく、展示でみたブラックバスやナマズを食べられるのが良かった。まさに、五感で楽しむ！の実践であった。

東京実習では、まず朝の集合時間が早いことに驚いた。全く実習には関係ないが、中学校の修学旅行以来東京にきたことがなかったので、まさか二度目に東京を訪れるのが博物館実習で、ひたすら博物館を巡り歩くとは思っていなかった。

今思い返せば、グループ別行動の博物館等自由見学の際に訪れた博物館の中には、最終的にはほとんど実習展に関係なくなってしまったところもあった。だがそれもまた良し。昭和の雰囲気を感じられるような博物館を中心にまわったため、“1963あゝ映画”の時代を体感できた点では非常によかった。柴又のハイカラ横町は、周辺の寅さんの撮影で使われたレトロな町並みもステキでオススメ。全く関係はないが、ずっと探していた蔦谷喜一の塗り絵を買えたのもうれしかった。もし機会があれば、先生方も行ってみられてはいかがでしょうか。もっと展示案をこのときまでにある程度固めておけば、ここでプロマイドなどを揃えられたと思われるので、この点は反省点である。アド・ミュージアムでは、一般的な博物館の展示とはまた違った新しい展示の仕方をしており、私たちの展示の見せ方や、様々なデザインを考えるインスピレーションを得ることができた。

この東京実習で、十一人の刺客のそれぞれの距離が少しずつ縮まり、さらに東京実習中に実習展の役割分担が正式に決定した。ここから、十一人の刺客による「あゝ映画」の展示構成が進んでゆく。

3. 実習展 十一人の刺客による「あゝ映画」

前述の通り、東京実習中に班の役割分担が決定したのだが、あろうことか私が代表に選ばれてしまった。これには困ったが、選ばれた以上全力でやりきらせて頂こうと思い、また班メンバーの力強いサポートのおかげで、何とかこれまでやってこられたというかんじである。自分から積極的にやろうとしてなったわけではなかったが、今は本当にさせて頂けて良かったと思う。全体

をまとめる難しさと、仕事を振り分ける大変さ、責任感を学ぶことができた。大変なことも多かったが、班のメンバー全員の得意分野の能力を常に見ることができ、深く関わることができ、なにより実習展を一番楽しむことができたのは、代表をさせてもらえたからだと思う。

実習班は、デザイン上手、素晴らしい文章を書く、フットワークが軽い、知識量が膨大、写真家、画像の加工、仕事が早い、確実で丁寧、地図が作れるなどなど、多彩なメンバーがおり、それぞれ自分の得意分野の力を尽くして協力して展示を作りあげた。ほぼ揉めることも無く、仲間割れも起こらず、本当にメンバーに恵まれた班であった。メンバーに心から感謝である。私が仕事を振るのが下手で、メンバーの仕事量に偏りが出てしまったこと、勢いで突き進めてしまったこと、いつも仕事がぎりぎりであったことは、私がメンバーに対して申し訳なく思っている点である。

全体を通しての反省点は、時間割等の関係で、全員で集まれる機会が少なかったこと、それに伴って、集まるメンバーが大体同じで、どうしても状況の把握に差が出てしまったこと、それぞれが持っている知識の量に差があったこと、仕事に偏りがでたこと、発言するメンバーが大体同じで、意志が一致しているのかわかりにくかったこと、はりきりすぎて図録のページがオーバーしてしまったことなどである。後輩へのアドバイスのようになるが、知識の差などは、まとめたプリントをみんなで共有したり、ラインを活用したりしてカバーするようにはしていたが、やはりやりにさはあるし、絶対に集まる機会は多くするべきである。また、話し合いでは積極的に意見を述べるべきである。そちらのほうが話し合いを進めやすいし、みんなで納得して良い展示ができるはずである。また、学校の中にいるのではなく、自分の展示に関係のある場所には行ってみるべきである。実際に自分の目で見ること、展示する面白さが違うし、説明の際もイメージがしやすくなるであろう。

前述のとおり、この実習を通して様々な素晴らしい人たちと出会えたのも、私がこの実習で得たものの一つである。私が担当したところでいうと、国際映画劇場の専務さん、映画看板絵師の八條さん、ブリキのおもちゃと人形博物館の館長さんなど、どの方も快くお力を貸して下さった、優しく、熱い方ばかりだった。国際劇場の専務さんは、いつも行くたびにいろいろなことを熱く語って下さり、実習展後はお疲れ会まで開いて下さった。その専務さんが紹介して下さったのが、八條さんである。この方については、図録のコラム2に大きく取り上げさせて頂いたが、まだまだ書き足りないほどである。八條さんも、本当に気さくで面白く、熱い方で、実習以上のことを話し、学ばせていただくことができた。この方々がいなければ、展示を完成させることはできなかった。本当にこの方たちとのご縁があって良かったと思う。私たちが展示で伝えたかったものの一つが、この“熱さ”であった。

展示をするにあたって残念だったのは、映写機が置けなかったことと、実際に映画を流すことができなかったことである。これらができれば、もっとおもしろい展示ができただろう。一つのを置くにしても、安全に、かつどのように見せればよいのか、文字のフォントはどうすれば見やすいのか、解説の分量や位置はどうするのか、そして資料についての勉強など、考えることは山のようにあり、それに加えてサークルの練習、毎日のリードセンター通いなど、すべきことが多すぎて折れそうになる日々が続いた。だが、それ以上に自分たちの手で、試行錯誤を繰り返しながら展示を完成させていくことは面白くもあった。それだけにすべて完成した時の達成感

は最高であった。これほどまでに充実した、熱い大学生活を過ごしたのは初めてであったし、他では絶対に得ることのできない、本当に良い経験になった。

おわりに

実習展では、人に自分の考えを、展示を通じて伝えることの難しさや、熱く何かに取り組んでそれをやり遂げる面白さ、人との出会いの素晴らしさを学ぶことができた。やはり書きたいことが多すぎて、4000字には収まらなかった。私たちの展示と同様、“35ミリにゃ収まらない！”である。この経験と、実習で得られたたくさんのものを、これからに活かしていきたい。

最後になりましたが、一年間を通してご指導くださった先生方、博物館事務室の皆様、展示にご協力くださった皆様、ともに展示を作りあげた“十一人の刺客”の皆さん、本当にありがとうございました。

はじめに

以前、「博物館概論」という授業の一環で、「神戸海洋博物館・カワサキワールド」の来館レポートを作成したが、「博物館実習」（以下本授業）を受けた後、以前と注目する点は異なるのだろうか。また、本授業で学んだことは実際に活かされているのかと疑問に思い、本授業の課題レポートとして再度来館レポートを作成することにした。1回目の来館レポート（改訂版）と2回目の来館レポートを比較してみたいと思う。

1. 来館レポート（1回目：2014年7月25日）

2014年7月25日、兵庫県神戸にある「神戸海洋博物館・カワサキワールド」を見学してきた。神戸海洋博物館の中にカワサキワールドがあり、入場料600円で両館見学できるのである。

「神戸海洋博物館」は神戸開港120年記念事業として、神戸港振興協会が建設し、1987年に開館した。2005年4月に「海から港から神戸が始まり、未来に船出する」を新たなコンセプトにリニューアルオープンした。「現代から未来の神戸港」「歴史から見た神戸港」と二つのコーナーに大別し、神戸開港を中心とした海・船・港の昨日・明日を展示している¹⁾。

入館してすぐにある大きな『英国艦船「ロドニー号」』の模型が印象的だった。長さは12.4メートルあり、細かな部分まで再現されているようだった。とてもインパクトがあり、そのクオリティにも感動したが、撮影不可なのが残念だった。ジオラマ模型や船舶模型がたくさん展示されており、個人的にミニチュアの模型が好きなのでとても楽しめた。模型によっては人間のミニチュアも設置されており、模型の実際の大きさを想像できてよかった。すべての模型が忠実に再現されていたのはいいが、表から見た外観のみの模型だったので、中心で割って船の内部構造も見られるようにした方がより良いのではないかと感じた。神戸港の施設や役割について紹介している映像コーナーがあったのだが、日本語、英語、中国語、韓国語の4か国語に切りかえられるようになっていた。私が来館した日も外国の方たちのツアー客が来館しており、海外からのお客様も多いのだと感じ、そのようなお客様にも配慮した映像となっていてよかった。モニターの前には神戸港の模型があったのだが、映像で紹介している部分（倉庫など）が光る等して、一目でどの部分の紹介をしているのかがわかるようにすればより良いのではないかと思った。展示室には学芸員や職員がおらず、少なくとも一人は質問に答えるためや監視のためにも必要ではないかと感じた。神戸港についてその施設や役割、歴史について学ぶには最適な場ではないだろうか。しかし（後に記述するが）、カワサキワールドと比べて子どもの見学者がとても少なく、展示室内に入ってもすぐに出て行ってしまう子どもがほとんどだった。模型の展示ケースも私の胸下くらいの高さで、子どもには見づらいように感じた。実際に模型に触れる等、子どもも興味を持つような工夫が必要ではないだろうか。

「カワサキワールド」は神戸港とともに歩んできた川崎重工業の創業以来の歴史から、製品紹介まで、見て・聞いて・体験することができる企業博物館である。初代0系新幹線やヘリコプター、

モーターサイクルなどの実物展示を通じ、同社の陸・海・空にわたる事業を紹介している²⁾。

館の紹介にもあるように、モーターサイクルに跨ったり水上バイクの操縦ゲーム、電車の運転ゲームなど、実際に見て・聞いて・体験することができた。ゲームがある場所や各ブースに職員の方が配置されており、操作方法の説明や写真撮影を行ってもらえるのがよかった。他の博物館と比べて職員の人数が多く、また、その展示物の解説も詳しく行って頂き、サービスが行き届いていたように感じた。たくさんのモーターサイクルが展示されており、実際に跨って撮影することもできた。そのモーターサイクルは年に一定期間で変わるそうなので、何度でも楽しめるのではないだろうか。実物の『川崎バトル KV-107Ⅱ型ヘリコプター』を展示しており、実際に座席に座ったり操縦席を見ることができた。他にも、0系新幹線や『SWIMO』の実物大模型も展示されており、いずれも展示されているだけではなく中に入ることができ、また撮影ができるのもよかった。子ども連れのお客様が多く、運転席で楽しそうに写真撮影していたのが印象的だった。展示室の片隅には水分補給ができる休憩室が設けられており、自販機やテーブル、イスも設置されていた。館内はイスがいたるところに設置されており、子どもが遊んで親が座って見ている、という場面が多々見られた。イスの設置場所も子どもが興味を示しそうな場所、遊びに夢中になりそうな場所がよく見える位置に設置されており、来館者への配慮が伺えた。

両館とも楽しんで学ぶことができ、とても良い博物館だったように思うが、特にカワサキワールドは大人から子どもまで、幅広い年齢層の方が楽しめるよう工夫されていて素晴らしかった。自分が母親になった際、子どもと一緒にいきたい博物館だと感じた。

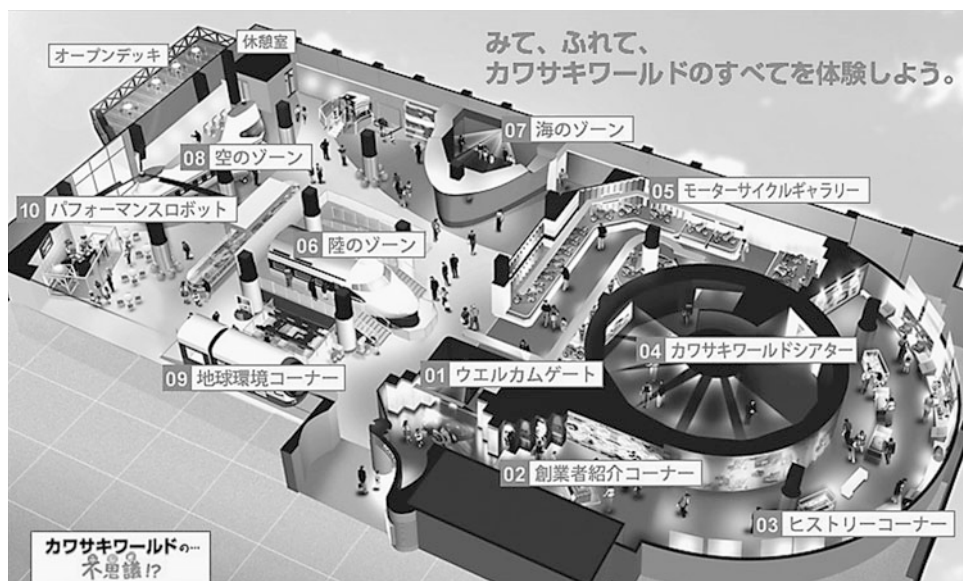
2. 来館レポート（2回目：2015年1月14日）

2015年1月14日、上述したレポートと同様に、「神戸海洋博物館・カワサキワールド」を見学してきた。今回はJRの元町駅から徒歩（約15分）で向かったのだが、道中に案内板がなく、少し不親切なように感じた。店やオフィスがあるため、案内板を立てるのは難しいのだろうか。前回はタクシーで向かったのだが、片道800円ほどだったので、タクシーで向かっても良いかもしれない。また、小さな子供を連れた家族連れには徒歩15分は遠いように感じた。休日や夏休みといった長期休みの家族連れが多い時期には、送迎バスを出すのはどうだろうか。

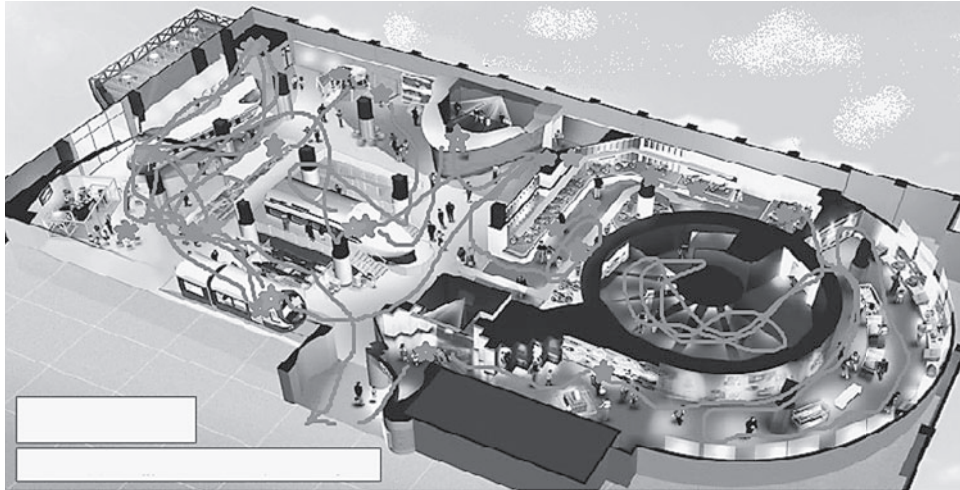
「神戸海洋博物館」は、前回と展示内容にあまり変わりがなかった。やはり前回に感じた要改良点は、今回も感じた。しかし、前回はあまり注目していなかった展示物の固定の仕方など、展示法を観察することができた。この点は、本授業を受講したことにより得た着眼点であるように思う。入館してすぐにある大きな『英国艦船「ロドニー号」』の模型は、前回はその大きさにのみ注目していた。しかし、よく見てみると太いワイヤーのようなもので天井から固定されていた。大きなものほど倒れると危険なので、嚴重に固定されていたように思う。一度固定している器具に注目してしまうと目についてしまうため、可能であれば留め金やワイヤーを透明にした方が良いと感じた。先にも述べたが、展示内容に大きな変化がみられないため、（特に子どもは）何度も来館したいと思えないのではないだろうか。1年の内何度かは企画展のようなものを行うのはどうか。また、「博物館」には関係がないが、「神戸海洋博物館」という建物内にレストランだけでなく、喫茶店のような気軽に休憩に入ることができる施設を作るべきだと感じた。

「カワサキワールド」は、「神戸海洋博物館」と比べると見学者も多く、また、職員の方も多か

った。前回と同様に、各ブースに職員がいるため、解説や写真撮影などスムーズに行え、サービスの質の高さを感じた。こちらは来館者が多かったため、その動向を調査してみた。以下、【図 I】館内図と【図 II】来館者動向調査図である。今回は、家族連れの（推定5歳の）男児の動向を調査した。幼児ということもあってか、「創業者紹介コーナー」や「歴史コーナー」にはあまり興味を示しておらず、すぐに通り過ぎていた。「モーターサイクルギャラリー」では、モーターサイクルに跨って写真撮影を行っており、やはり実際に体験できるというのは子供にとって興味をそそられるのであろう。「海のゾーン」ではモーターボートの体験ゲームがあり、すぐに興味を示していた。2回プレイし、最終的に一度館内をすべて回った後、再度訪れてプレイしていた。実際に乗って操縦しているようなゲームは子どもにとってもおもしろいのであろう。新幹線やヘリコプターといった、中に入ることができる乗り物にもとても興味を示していた。両親も遊ぶ子供の写真をたくさん撮影しており、良い思い出になるであろう。他には、電車を操縦するゲームにも興味を示しており、2度足を止めていた。また、休憩室も2度利用していた。一度すべて回った後に休憩し、もう一度回っていた。見て遊ぶものが多いため、休憩室を設けているのは来館者への配慮がなされているように感じた。また、先にも述べたが職員の数が多いため、親が（完全に目を離すのはもちろんいけないが、）子どもが見える場所で座っていてもさほど危険性はないのではないだろうか。見学の動向を調査した結果、ゲームの類に特に興味を示していたように感じた。見て実際に体験することもでき、子どもにとっても興味をそそる展示内容であったのではないだろうか。そして、イスの位置や休憩室、職員を多数配置するといった、共に回る親側にも配慮がなされているように感じた。



【図 I】館内図



【図Ⅱ】来館者動向調査図（赤線：軌跡、赤★：立ち止まり1回目、ピンク★：立ち止まり2回目）男児、2時間23分

おわりに

再度来館レポートを作成してみて、やはり一度目に感じたことや気になった点は、二度目も同様の感想を抱いた。しかし、一度目の来館と比べ、二度目は注目する点が増えていたように思う。また、来館者の動向調査といった、本授業を受講しなければ行わなかったであろう調査から、前回とは異なった発見もあった。このことから、再度来館し、調査したことに意義があり、本授業で学んだことも活かされていたように思う。

注

- 1) 神戸海洋博物館パンフレット説明文より。
- 2) 神戸海洋博物館説明文より。

通年で行われた博物館実習を実習展、博物館等見学、東京宿泊研修にわけて振り返り、一年間で学んだこと、これからの博物館と自分の関わり方を考えたい。

【実習展】

私は今年度の博物館実習展で主に、関西大学総合図書館からの資料の借用と、図録の作成を担当した。

書類を提出しさえすれば図書館の資料は借りられるということで、貸し出しに関しての交渉などの大変さはなかったが、その分、提出する書類の期限や、許可がおりるまでの日数を考えて動かなければいけないことが大変だった。また、借用するものを選定する段階から、特別な閲覧の手続きや、許可後の閲覧などで貸し出しまでかなりの期間を要したため、資料借用のためにいかに早めに動かなければいけないかを実感した。実際借用に行った際には、地図などの一枚ものもあったため、事前に梱包材を準備しておく必要があった。

また、調書は借用先で手早く書けるようにするため、授業で聞いた通り、本のタイトルや大きさなど、事前に書ける部分は書いていったが、図書館であったため、カウンターでの貸し出しで、借用先の方が見ている前で調書を書くことはなかった。ケースバイケースで相手に合わせるということをして直に学んだ経験だった。

さらに、関西大学総合図書館からは多くの資料を借用したため、何がなんの資料であるかの把握と、リストを作成しての正確な管理が不可欠だった。梱包材料にもマスキングテープで「関図1」などの番号をふり、返却の際にそのまま使える工夫をしておくことが必要とされた。

図録の作成も早めに取り組むべきだったが、展示物の選定が最後まで曖昧なものや、実習展直前にしか借用できないものもあったため、図録用の写真撮影や編集がギリギリになったものもしばしばあった。撮影の段階では立体物や、一枚もの、それぞれ大きさが同じものをまとめて撮影することや、借用の際に作っておいた資料番号の紙と一緒に撮影することで、それぞれの資料を見分けるなどの工夫を行った。

図録で力を入れた部分は解説文だ。それぞれのトピックにあわせた大まかな解説文と資料それぞれに対する解説を班員で分担して執筆したが、それを何人もの目を通して、主観的な文章をなくせるよう努力した。

また、図録では再三の見直しと微調整が欠かせなかった。作成中はもちろん、フォントの大きさやタイトルのデザインや位置を微調整してきたが、完成と思われる原稿を刷っても、見直すと必ず粗がでてきた。最後の原稿は6人程度で見直したが、それぞれ気がつくポイントが違い、全員分をあわせて訂正しても、何度も見落としが見つかった。出版物作成の大変さを、身をもって感じた。製本の段階では丁寧さが求められ、美しい図録をつくるためにも時間の余裕が必要だった。

展示期間が始まって、展覧会は完成ではないことも強く感じた。インタープリテーション用の資料もトピックごとに作成していたが、来館者はさまざまな予想もつかないような疑問を持つ

ており、毎日の班員の共有が不可欠だった。キャプションの字の大きさや展示物の位置の指摘などもうけたが、一番考えきれていなかったと感じたのは大勢の来場者が来た際の展示物の見えにくさだ。人がひとりでもわるにはなんの問題もなかった動線も、来場者が少し多くなるだけで、奥まった年表がまったく見えなくなるなどの問題が浮上し、毎日が試行錯誤だった。

【博物館等見学】

この一年でいくつかの博物館を見学したが、博物館を見る自分の目が少し変わったと感じる。例えば弥生文化博物館では来館者の見学動向の観察を行い、学芸員が意図する動線を必ずしも来館者がとるとは限らないことを実感した。そしてモックアップとしてクイズを作成することで子どもの興味を引くことに成功した。

今まで私は、自分の興味のある絵画の展覧会しか好んで行かなかった。しかし、まったく興味のなかった仏像の展覧会ひとつをとっても、学ぶことや感じること、学んだことの再確認が非常に多かった。仏像の後ろ姿を見られるように設置された鏡に「こんな工夫が必要なんだな。」と感じ、阿修羅像の細いたくさんの腕を見て「梱包が大変だ。どんな風に梱包したんだろう。」と考えることができた。

そして大阪市立科学館や琵琶湖博物館ではハンズオンなどで、子どもが遊び感覚で学べる博物館の存在を実感した。自然史系の博物館は水族館くらいしか縁がなかったが、フィールドワークとして山中を散策しながら聞いた火山灰の話や、昆虫の話は今でも覚えており、将来自分の子どもにもこんな学び方がさせられたらいいなと思った。

【東京宿泊研修】

東京の宿泊研修は、実習展の開催にあたって関連する博物館や、参考にできそうな博物館を自分たちで探して予定を組んだ。自分が東京に観光に出かけ、わざわざ博物館めぐりをすることはないので、非常にいい機会になった。下町風俗資料館では再現模型のおもしろさを感じ、東武博物館では、自分たちの展示内容に近い鉄道の年表などを見ることができ、それぞれの博物館を自分たちの実習展にいかすという感覚をもってまわられたと思う。

以上を通じて感じたことは、座学、つまり机上の勉強だけでは学芸員というものは学べないということだった。

授業で調書の取り方を学び、梱包の仕方を学び、巻物の巻き方を学ぶ。そうしているころは、なんだかもう二度と使わない技術を学んでいるような、本当に自分がそれをする機会のないようなことを学んでいる気分だった。しかし振り返ってみると、実習展に向けての準備の中で、本当にひとつ残さず復習、または実践の機会があった。博物館の見学に行くことも今までの自分なら、ただ見に行ったという事実しか残らなかったのに、初めて、「見て学ぶ」ということを実践できたように思う。

この一年は、これから私がどのように博物館に関わっていきたいか、どの様な博物館を望むか、長い間考えることのできる一年だった。

博物館は万人に開かれた存在でなければいけないと思う。しかし現状として、万人が利用しているとと言える博物館はないだろう。

私は今でこそ自分の好む展覧会にしか行かなくなりましたが、幼いころから、両親や祖母に本当に多くの博物館やその他類似施設、図書館などにも連れて行ってもらうことが多かった。それにも関わらず、そのころの博物館のイメージは家族で遠出、つまりわざわざ遠くから足を運び、珍しいものを見に行く、というものだった。そして一度、恐竜博物館なり、歴史博物館なり、科学博物館などを訪れてしまえば「あ～面白かった！すごかったね！」という一時の発見や驚きで終わってしまっていた。博物館のリピーターにはほど遠く、リピーターとなるのはその分野の専門家や研究者、またはマニアしかいないという現状が、これまでの私のような状態だろう。大勢の市民は一度訪れるか、または一度も訪れないかで一生が終わってしまうのだと思う。

しかし博物館は利用されなければ価値がない。見たい人だけ来たら良いというのは経営上も大きな問題であるだろうし、宝の持ち腐れだろう。博物館は主体的に働きかける施設であるべきだし、そうあってほしいと思う。

では、人に関わることのできる博物館とはどのようなものだろう。それが生涯学習施設としての博物館であると私は考える。経済はグローバル化し、産業構造は変化、社会は情報化・高齢化している。その中で人が生涯にわたり一体どこで学ぶのかを考えた際に、中心的な存在になるべきが、博物館などの生涯学習施設だろう。

博物館は、調査研究機関・文化施設であるが、それと同時に市民に貢献すべき施設だ。したがって、博物館コレクションとの出会いが、一生の学びにつながれば、博物館が生涯学習施設の役割を十分に果たしていると言えるだろう。すぐれた資料・コレクションが市民の身近にあることは、学びへの意欲と感心を広げるはずだ。そんなコレクションを用意するのが博物館で、そこを利用するのが私たちだ。

市民の身近にあるべき博物館が取り組むべき課題は、なによりも、人が何度も訪れたくなるメリットを創造することだ。また、博物館のある地域の学校の学習活動に協力し、支援することで、生涯学習者を育て、将来子どもを博物館に連れてくる親を育てることになるだろう。

私は四回生で、春から一般の企業に就職することになるが、これからも積極的な利用者でありたいと思うし、将来子どもを博物館に連れて行く親になり、老後を博物館で過ごす高齢者になりたい。魅力的な博物館を探す努力も怠らず、興味の幅を広げて多くを学びたい。この一年で、博物館の良さを少しでも多くの人に伝えられる内容を学べたと思う。だからこそ、博物館も主体的であることを望み、そこに積極的に関わる利用者になりたいし、そういった利用者を一人でも増やすことができれば良いと私は思っている。

博物館実習を終えて

村上 敬

はじめに

博物館実習の最終授業のなかで、北川博子先生と藤尾隆志先生は、最近ご勤務先を移られたことについてそれぞれ触れられた。そして、北川先生が“学芸員として雑務をこなすことの大切さ”について述べられ、藤尾先生はご勤務先が変わったことで、ご専門も変わり、“日々勉強である”とおっしゃった。ところで、博物館実習展は、学生が自分たちでテーマを決め、それに自主的に取り組むというのが主旨であった。もっとも、実際に博物館や美術館に勤めるようになれば、両先生もおっしゃられたように、展覧会や日常の業務は必ずしも学芸員個人の興味・関心を埋めるものとは限らず、むしろ雑務の方が多いであろう。

そして、今回の実習展は、結果的に、実習展に先立って行われた祭礼調査の班編成を引き継ぎ、特に筆者の所属していた「神になった人間―菅原道真―」班にいたっては、そのテーマも祭礼調査の延長線上にあった。すなわち、親しい班員同士がかねてより持っていた興味・関心によって集まり、テーマが決められたというわけではなかった¹⁾。学生に主体性が足りなかった反面、より実務に近い形で実習展ができたのではないかとも思われる。今回のレポートは、その実習展を通して学んだことについて述べたい。

【内容】

はじめに

1. 「神になった人間―菅原道真―」展の概要
2. 「神になった人間―菅原道真―」展の良かった点
3. 「神になった人間―菅原道真―」展の問題点と改善策
4. 博物館実習を通して学んだこと
 - (1) 借用の難しさ
 - (2) 意志疎通の難しさ
 - (3) 年配者の学習意欲の高さ

おわりに

1. 「神になった人間―菅原道真―」展の概要

筆者の所属していた「神になった人間―菅原道真―」班は、昨年7月に博物館実習の一環として行われた祭礼調査において、天神祭りについて調査を行ったメンバーを中心として編成された班であった（11人中10人が天神祭り班）。

ただ、そのテーマ選択は惰性的であったことを否めない。すなわち、事前に天神祭りについて調べていたので、それに関連して菅原道真を選んだというのが実状であって、特に菅原道真にこだわりを持った班員がいたわけではなかった。このようなテーマ選択のメリットは、そのテーマ

に対し全員がある程度納得していたこと、デメリットは、班員の誰かが打ち出したテーマではなかったため、テーマに対する知識や主体性が欠けていたことである。したがって、テーマ選択をしたものの、その具体的な内容を決めるのに時間を要した。

最終的に、展示の内容は、①菅原道真の生涯（生前の道真）、②道真の信仰（死後の道真）、③観光地としての天満宮（私たちに身近な存在としての道真）と、時系列に沿って展示を行うこととなった。また、使用できるケースも、ちょうど3つであったので、上記の区分けのもと作品の陳列を行なった。なお、全体のバランスとして、②死後の道真に偏ってしまったといえる。

2. 「神になった人間—菅原道真—」展の良かった点

「神になった人間—菅原道真—」展の良かった点として、①展示の流れが分かりやすかったことが挙げられる。すなわち、展示の導線に沿って、道真に関する資料が時系列に並んでいたということである。また、1000年以上前の歴史上の人物を扱うため、本来は扱う作品が紙資料、とくに文字資料に偏りやすいテーマであったと思われるが、道真が宗教上の人物でもあったため、能面や掛幅など、②視覚的に分かりやすい作品を展示することができた。なお、展示のメインとなった作品は、ポスターにも用いられた二つの能面であった。その理由は、一方の能面が生前の道真を表現したもの、他方が神格化された道真を表わしたものの、そして両者とも現在の道真信仰において用いられているという、今回の展示の3つの要素をすべて含んだ作品であったためであり、また視覚的にもインパクトが強かったためである。そのため、展示全体の中心に置いたが、反省点としてはメインケースの中心の方がより良かったのではないかとのことである（写真参照）。



3. 「神になった人間—菅原道真—」展の問題点と改善策

一方で、「神になった人間—菅原道真—」展の問題点として、展示の流れは分かりやすかったものの、①その流れを明確にするための大項目サインがない、②解説文が不十分、③キャプションの文字が小さいなど、観覧者に対する配慮が足りていなかった点が挙げられる。また、前述のように、展示の内容を決定することに時間を要したため、借用が遅れてしまい、④関西大学図書館に所蔵されている道真関連の資料を借用できなかったこと、⑤展覧会の間近になって借用にいたった資料を図録に掲載できなかったことなども問題点である。

以上の問題点はすべて、取り掛かりが遅かったことが原因であった。つまり、早く内容を決めれば、借用も早く行なうことができ、時間に余裕があれば観覧者に対して気を配ることもできたであろう。よって、テーマが決まった以上、筆者を含め各自がより積極的に行動する必要があった。

4. 実習展を通して学んだこと

(1) 借用のむずかしさ

実習展のテーマとして菅原道真を扱うと決まった時、学芸員の諸先輩から、なぜあえて借用の難しいテーマを選択したのかと忠告された。その時点では実感がなかったが、実際に借用を行なってみてその難しさに気付かされた。

まず、筆者が借用を行なった作品は、掛幅二軸と絵葉書であった。そのうち、《渡唐天神図》については本学教員から、《東帯天神図》については知人から借用したため、特に難儀なく借用を進めることができた。なお、能面二枚は外部機関からの借用、絵葉書や絵馬は購入、その他の資料は関西大学図書館からの借用であった。

一方で、ほかに借用を試みた菅原道真関連の絵画資料については、借用することができなかった。その借用先は、天王寺区にある安居天満宮という神社であり、以前個人的に社務所改装に立ち会ったことがあり、宮司の方とも面識があったので、何か借用させていただける可能性があると思われた。ただ、実際に借用を行なうとなると、借用する側にとっては「資料」であっても、宗教施設にとっては「ご神体」であるという問題があった。結果的に、資料を借用することはできなかったが、実習展のチラシを配布していただけることになり、また実習展にも足を運んでいただけた。

後日学芸員の方にお尋ねすると、宗教施設などから資料を借用する場合、館の実績や信用度、また費用などの問題があり、博物館が行う展覧会であっても借用が難しい場合があるという。

(2) 意志疎通の難しさ

「神になった人間―菅原道真―」班は、金曜クラスから6名、土曜クラスから5名の計11名のグループであった。一つの班であったが、金曜クラス（文学部3回生中心）として、また土曜クラス（文学部4回生、他学部生、大学院生）として、という二つのグループ意識があったように感じられた。

共同作業を行ってみて苦労した点は、班員同士の意思疎通であった。まず、曜日が分かれていますため、直接会って相談できる機会が少なかったように思われる。基本的に連絡などは「LINE」というインスタントメッセージャーを使って行った。また、定期的に会議を行なうようになったのは、10月に入ってからであった。そして、オンライン上の文字による連絡だけでは、語弊があることや、余計な時間がかかること、参加に強制力が弱いことなどの難点があった。

実際の博物館における展覧会は、学芸員や、広告代理店、新聞社など様々な組織が連携して作り上げられていく。また、最近では博物館同士の連携事業、博学連携などが行われている。その際には、やはり頻繁に足を使い、直接に顔を合わせ、お互いに譲歩し合いながら交渉を行なうという基本的な人間関係が大切になるであろう。

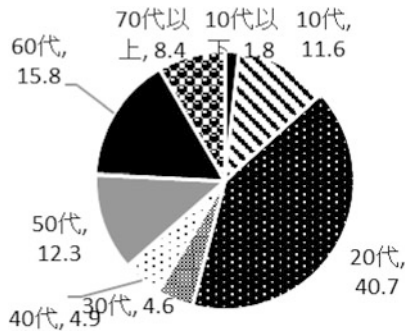


表1. 来館者の年齢

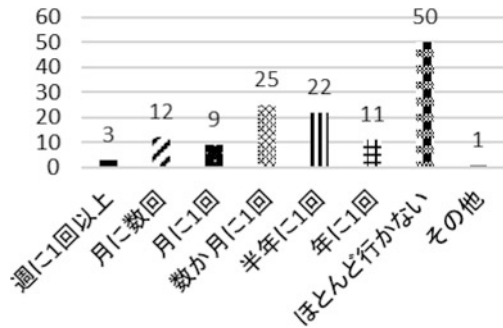


表2. 本学学生が博物館に行く頻度

(3) 年配者の学習意欲の高さ

実習展を行ってみて、博物館の観覧者には年配の方が多くに改めて気付かされた。博物館実習においても、アンケートによれば、およそ37%の方が、50代以上であった(表1)。最も多かったのは20代であるが、その所属を確認すると、ほとんどが本学学生であって、外部から足を運んでいただいた方はわずかだったと推測される。なお、外部からの方の多くはチラシによって情報を得たという。一方で、本学学生の半数は、普段「博物館にほとんど行かない」と答えている(表2)。また、筆者が2年前に参加した、かんさい・大学ミュージアム連携実行委員会による公開講座においても、参加者のほとんどが年配者であった。このように、博物館の提供する展覧会や公開講座は、生涯学習の場となっている。

おわりに

博物館関係の授業で、展示に関する基本的な知識を学び、博物館実習という実践の場を通して、机上の学習で足りていなかったさまざまな点に気付かされた。そして、実習展終了後の講評や授業において、実習展に対して反省が行なわれ、技術面に関する不備が指摘された。ただ、それは表向きの反省であって、学生の本音は違ったように感じられた。たとえば、放課後、学生たちだけで実習展を振り返ったことが何度かあったが、展示技術に関する話題が挙げられることは少なく、ほとんどが共同作業の難しさについてであった。つまり、程度の差こそあれ、筆者の回りにいた学生の多くは、班編成について反省、あるいは後悔していたようであった。しかし、冒頭で述べたように、それは必ずしもマイナスでなかったといえる。学芸員に限らず社会人になれば、他の組織の人間と共同して作業を行う必要がある。今回の博物館実習は、サークル活動やゼミナール、アルバイトなどとは異なった共同作業を経験する貴重な機会であった。

注

- 1) 班編成の際、米田先生と森先生は、実習展の班は祭礼調査とは関係なく、自分たちの興味・関心に基づいて行うようにご指導されたが、結果として、ほぼ祭礼調査の班編成を引き継ぎこととなった。